

第3 問題作成部会の見解

1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 経済活動に関わる事象を多面的・多角的に考察する過程を重視する。簿記の基本的な仕組みについての理解を問う問題や、企業における日常の取引に関する記帳や基本的な決算手続きを問う問題などを作成する。また、「財務会計Ⅰ」の財務会計の基礎（株式会社の会計の基礎的事項を含む）についての理解も求める。なお、問題の作成に当たっては、教科書等では扱われていなくても、既知の簿記・会計の基本的な概念や原理・法則等を活用すれば、適正な会計処理を導くことのできる問題などを含めて検討する。

2 各問題の出題意図と解答結果

当部会は、高等学校における「簿記・会計」の基本的な知識の習得度及び学習の達成度を判定し、入学者選抜のための適正な資料を提供することを基本方針として問題作成に当たった。すなわち、「簿記・会計」の出題範囲内で、できるだけ特定の分野に偏ることなく出題し、全問を解答させることによって、学習範囲内の広い分野についての基礎的・原理的な事項に関する理解の程度、記帳・計算処理に関する思考力、判断力、応用力を多面的に判断できるよう工夫した。なお、問題作成に当たっては、学習指導要領に準拠し、高等学校教育の現状を踏まえるように努め、かつ高等学校教科担当教員、日本会計研究学会及び日本簿記学会から寄せられた過年度の意見・評価を十分に斟酌した。

各問題の出題意図は、以下のとおりである。

第1問（配点A・B計40点）。第1問Aは、損益計算と資本の増減に関して、勘定記入と財務諸表の連携について併せて問うている。第1問Bは、期中取引の記入方法及び帳簿間の連携に関する簿記の基礎について網羅的に問うている。第2問（配点30点）は、複合仕訳帳制度における普通仕訳帳、特殊仕訳帳及び補助簿の間の有機的な関係にまつわる理解を、本支店会計に関する主要な論点と関わらせながら問うている。第3問（配点30点）は、株式会社の期中取引や決算整理を踏まえつつ、財務諸表の作成に関する理解を問うている。また、株式会社に特有の増資に関する簿記処理についても問うている。

本年度の平均点は、本試験が50.80点であり、昨年度の51.83点と比べて1点ほど下降した。これは、共通テストも3年目を迎え、一部出題形式の変更に対する心構えのできた学生が増えたものの、資料の読み取りに時間がかかった受験者がいたためではないかと思われる。資料数や問題数を吟味して受験者の負担を考慮しながら、基礎的な問題から思考力、判断力、応用力を問う問題まで幅広い難易度の問題を出題するように心掛けた結果、識別力の高い問題となった。

3 出題に対する反響・意見等についての見解

本年度も高等学校教科担当教員、日本会計研究学会及び日本簿記学会から、「簿記・会計」の試験問題に対して御意見を頂いた。問題の全体にわたって綿密かつ詳細に検討され、貴重な意見を寄せて頂いたことに対して、問題作成分科会として心から感謝の意を表する次第である。寄せられた意見は今後の問題作成の参考とする所存であり、当分科会としては、今後も共通テストの本旨を尊重して、受験者に考えさせる問題や総合的な理解を問う問題作成に努めていきたい。

① 出題全般に対する評価

高等学校教科担当教員からは、出題内容について、「すべての問題において指導要領・解説の範囲

内であり、特定の教科書や分野に偏ってはならず、指導要領の目標に沿って、簿記・会計の基本的な仕組みの総合的な理解度を見ることのできる問題となっている」との評価を頂いた。また、問題の難易度については、「全体的な難易度は昨年度と同程度であると思われるが、資料の読み取りに時間がかかる問題も見受けられ、やや解答時間に不足があったように思われる」との指摘を頂いた。

日本会計研究学会からは、出題内容・問題の難易度について、『簿記・会計』の学習範囲を網羅しており、また難易度も初歩的・基礎的なものから、思考力・判断力を問う応用的な問題にまでわたり、偏りのないバランスの取れた問題となっている」との評価を頂いた。また、出題形式について、「共通テストからの新傾向として会話形式の問題が出題されていることも含め、例年と同様の一般的な出題形式であった」との評価を頂いた。

日本簿記学会からは、「企業会計に関する法規や基準の変更留意しつつも、学習指導要領の目標や内容に沿った内容となっており、また、大学教育の基礎力となる知識・技能や思考力・判断力・表現力等を問う問題作成を志すという共通テストの求めるところから従ったものである。『簿記』及び『財務会計Ⅰ』の基礎・基本を理解し、学習が一定水準まで到達しているかどうかを測るという出題の目的を十分に果たした」との評価を頂いた。また、難易度について、「基礎的な問題から応用的な問題へと展開され、受験者の学習到達度が反映される問題設定である。過年度の問題より解答に要する時間は少なく、限られた時間内で取り組むことができる適切な分量であった」との評価を頂いた。出題内容について、「用語を選ばせる形式と、計算させる形式が適度に混在しバランスのよい出題となっている」との評価を頂いた。

② 各問題に対する意見・評価

高等学校教科担当教員からの各問題に対する意見・評価と、それに対する当部会の見解は、以下のとおりである。

- (1) 第1問Aについては、「内容・程度ともに適切であった」との評価を頂いた。今後、出題内容が高等学校の授業でどの程度取り扱われているかについて十分留意した上で、バランスの取れた問題の作成に努めていきたい。
- (2) 第1問Bについては、新入社員研修を想定した場面設定による会話問題が「簿記・会計の共通テストにふさわしい内容である」との評価を頂いた。引き続き、出題内容が高等学校の授業でどの程度取り扱われているかについて十分留意し、読み取りやすさなどにも配慮した上で問題作成を続けていく所存である。
- (3) 第2問については、「設問全体としては、第2問は最もボリュームが多く、帳簿のつながりを見渡しながら取引を推定する力が問われることから、読み取りに時間をとられてしまった受験者も多かったと思われる」との指摘を頂いた。今後の出題に当たっては、資料全体の読み取りやすさに配慮するとともに、解答時間のバランスを保てるボリュームで出題することを心掛けていきたい。
- (4) 第3問は、「株式会社の決算に関する問題である。期末の取引や決算整理事項等も基本的なレベルであり、解答しやすい問題であった。」との評価を頂いた。また、各問においても、「決算に関する幅広い知識を問う基礎的な問題であり、取引の量、推定箇所数は適切で、バランスの取れた構成となっている。」という評価を頂いた。ただ、第2問に時間を取られた受験者が第3問において時間不足であったのではないかという御指摘を頂いたことから、問題構成ならびに解答時間の配分に注意を払って問題の作成を心掛けたい。

日本会計研究学会からの各問題に対する意見・評価と、それに対する当部会の見解は、以下のとおりである。

- (1) 第1問Aについては、「損益計算と資本の増減に関する理解を問う初歩的・基礎的な問題であ

り、良問である」との評価を頂いている。また、問1の解答群における語句の配置について、問題作成の意図をくみ取ったコメントを頂いており感謝申し上げます。

(2) 第1問Bについては、「帳簿の記入に関する会話形式の問題であり、よく練られた良問である」と評価を頂いている。また、問2の解答手順について、問題作成の意図をくみ取ったコメントを頂いており感謝申し上げます。今後も解答手順等について受験者の負担感を配慮した上で、問題作成を続けていく所存である。

(3) 第2問については、「複雑になりがちな複合仕訳帳制度の問題であるが、平易な取引に限定することで問題の難易度への配慮が感じられ評価できる。また、資料が見開き2ページに収まるように配置され、解き易さに配慮されているが全体としてはやや難易度が高いと思われる」との指摘を頂いた。

当座預金出納帳の「ケ」「コ」について、「当座預金出納帳の借方合計から逆算して求める他ない」との指摘を頂いた。難易度の高い問題については、正答に至る方法を複数用意するなど、出題の工夫をするよう努めていきたい。また、「仕入帳の記入の一部が省略されていることでも難易度が上がっている」との指摘を受けた。直接的に解答に影響しない部分を省略する出題上の配慮であったが、出題についてさらに工夫するよう努めていきたい。問4は、容易に求めることができる問題ではあるが、問3までの難易度から解答時間切れで正答できなかった受験者も多いと推察できると指摘を頂いた。この指摘を真摯に受け止め、今後の問題作成においては、難易度を工夫するよう努め、教科書に準拠しながら総合的な理解力を問うような問題作成に努めていきたい。

(4) 第3問については、「株式会社の決算手続きに関する総合問題で、損益計算書と貸借対照表を完成させる問題となっている。基礎的な論点が多く、株式会社の取引も含めたバランスのよい良問である」、「見開き2ページに収まるように配置され、解き易さに配慮されている」との評価を頂いた。また、「標準的なものが出題されている」、「金額の桁数が少なく、百分率の計算も計算機がなくても容易」と評価して頂いた。解答箇所について資料の順番を加味して作問している点も評価を頂いているが、複数の資料を読み解いて解答する箇所では正答率が低くなるという御指摘も頂いたことから、難易度に配慮しつつ受験者の応用力を問う問題の作成に努めていきたい。

日本簿記学会からの各問題に対する意見・評価と、それに対する当分科会の見解は、以下のとおりである。

(1) 第1問Aについては、問1及び問2について良問であるとの評価を頂いた。また、問3について、棚卸資産の自家消費を行った際の仕訳に関して指摘を頂いた。問3については、高等学校の教科書で説明されている仕訳の解答を求める問題であったが、受験者から疑義を抱かれないう、今後の問題作成においては十分な注意を払いたい。

(2) 第1問Bについては、読解力も必要となることにも言及された上で、「大学教育を受けるのにふさわしい能力・意欲・適性等を判定できる良問であった」という評価を頂いた。なお、問5について、同じ日付に行われた取引であっても、支払先の異なる取引は、取引を分けて記帳することが望ましい旨の指摘を頂いた。御指摘頂いた内容を今後の問題作成に活かしたい。

(3) 第2問については、「資料が4ページにまたがり、各帳簿の関係を踏まえて解く必要があるため、ページを何度もめくる必要があった」との指摘を頂いた。また、「資料が複数ページにわたる本文のようなケースでは、受験者が問題に取り組みやすいように、普通仕訳帳に記入されている1月24日を別の日付にする等の配慮が望まれる」との要望を頂いた。問1については良問としての評価を頂いた。問2については、「普通仕訳帳が他の帳簿と同一ページに収まらな

かったため難解となった」との指摘を頂いた。問4については受験者の思考力を問う良問であったとの評価を頂いた。今後の出題に際しては、資料の読み取り易さに一層気を配り、受験者が問題に取り組みやすいよう工夫した問題作成に努めていきたい。

- (4) 第3問については、「決算手続きに関する標準的な問題であり、残高試算表、取引、決算、整理事項等のすべての資料が提示されているので、手順に従い金額を求めることができる。受験者に安心感を与える問題であった」との評価を頂いた。また、解答箇所について、資料から「容易に算出することができる」、「頻出度の高い問い」、「平均的な難易度の問題」、「オーソドックスな出題」、「決算手続きの理解度を適切に測定できる良問」という評価を頂いた。ただし、「資料3」の(3)『貸倒引当金の差額補充額』と(8)『支払家賃の繰延額』は、「資料1」・「資料2」・「資料3」の手順に従い金額を求めても、問いとして要求されていないため徒労に終わる。今回の出題形式の場合、(3)は3%の条件のみ表示し、(8)の計上額は予め示しておいた方が良心的であり、受験者の負担軽減になるものと思われる」という指摘も頂いた。今後は、受験者が解答箇所を考える上での手数や順序、解答箇所ではないものの空欄(括弧)とした方がよい箇所などについては、難易度や問題構成の観点から十分に留意したい。

4 まとめ—今後の問題作成に当たっての留意点—

当部会ではこれまで、共通テストの本旨を尊重し、①高等学校における「簿記・会計」の基本的な知識の習得度及び学習の達成度を判定すること、②入学者選抜のための適正な資料を提供すること、の2点を基本方針として問題作成に当たってきた。思考力・判断力を重視する共通テストの方針に沿った形で問題作成を行ったが、共通テストも3年目となり、会話を伴う新しい出題形式にも受験者が慣れてきたものと思われる。

今後も、受験者が問題全体にわたって解答できる時間が確保できるよう留意し、引き続き、学習指導要領への準拠、教科書で使用されている表現の尊重など、これまでの取組を継続していきたい。さらには、簿記の基本的な仕組みについての理解を問う問題だけでなく、企業における日常の取引に関する処理も取り入れ、また、高等学校での学習内容をもとに思考することで解答を導くような、思考力を問う問題を作成するよう留意していきたい。より詳細かつ慎重に、出題範囲や内容、出題方法・形式等について検討するとともに、受験者の高等学校における「簿記・会計」の基本的な知識の習得度及び学習の達成度を判定する指標としてバランスの取れた設問となるよう十分に考慮し、識別力の高い良質な問題作成に当たることとしたい。